

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：32304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380898

研究課題名(和文)虐待予防に向けた「子どものネガティブな感情表出を受け止める養育力」強化方法の解明

研究課題名(英文) Developing the method how to raise Japanese parental ability to cope with their children's negative expressions for prevention of child maltreatment

研究代表者

石 曉玲 (SHI, Xiaoling)

東京福祉大学・社会福祉学部・講師

研究者番号：30529483

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「子どものネガティブ表出を受け止める養育力」を高めることが虐待予防の鍵だという着眼点から、乳幼児を持つ母親のインタビュー調査の結果を基に「子どものネガティブ表出を受け止める養育力尺度」を開発し、調査研究を系統的に行った。因子分析の結果から「怒りによる統制」「感情の混乱」「回避・統制不能」「配慮・説明」という4因子構造が確認できた。虐待行為傾向得点を高める従来のリスク要因である育児不安や精神的不健康よりも養育力の影響のほうが強いことが示された。さらに養育力と母親の子どもと遊ぶ力、自己やしつけへの認知、対人関係、子どもの社会性の発達との関連を踏まえて親の養育力を高める方略を提案した。

研究成果の概要(英文)：Coping with children's negative emotional expressions is an important key factor to prevent child maltreatment. The purpose of this study was to develop the Parental Management of Children's Negative Emotional Expressions Scale based on the result of semi-structured interviews, and to identify relevant factors of the parental management ability with systematic researches. Factor analysis revealed a four-factor structure that included "Expressing parental anger to control a child", "Parental emotional confusion", "Inability to cope with a child/Avoidance", "Consideration for a child/explanation". And it was shown that the influence of child parental management ability is stronger than parenting anxiety and mental unhealthy of conventional risk factor which raises abusive behavior tendency score. Further, a strategy to raise parents' child management ability was suggested.

研究分野：発達心理学

キーワード：虐待予防 子育て支援 養育力 乳幼児 ネガティブな感情表出

1. 研究開始当初の背景

(1)日本では児童虐待の初期対応から介入までの一定の成果が出始め、防止から予防の段階に入ると言われている。しかし、研究開始の平成 24 年度では虐待の相談件数は年間 6 万 6,807 件にも上り、3 日に一人の子どもが虐待によって尊い命を落としている。このような状況を打開するための発生予防の鍵は、虐待を引き起こす根本的要因の同定と有効な方略の開発である。

(2)従来の一般家庭の育児支援は、「育児不安を軽減し虐待を防止する」ことを目的とした地域子育て支援拠点事業が主である。しかし育児不安は虐待を引き起こすリスク要因であるが、健康な育児においても一過性の育児不安を経験することがあり、逆に育児不安を自覚しにくいために虐待してしまうこともある(氏家、1996;花田・坂原・寺岡、2005)。育児不安よりも直接的に虐待行為に影響する要因として、子どものネガティブな感情表出に対して罰を与えずにこれを受け止める親の養育力が考えられ、それを高めることが虐待予防の鍵だと捉える必要がある。

2. 研究の目的

(1)本研究は、従来の親または子どもの側方の要因だけに注目するのではなく、親子間で衝突が起こりそうな場面の親子インタラクションに焦点を当て、家族間のダイナミクスを解明することが要であるという立場から、一般家庭における虐待予防の方法を開発することを目指す。子どものネガティブ感情を包容的に受け止める親と否定的に受け止め、罰を与える親の養育力の違いは何かを探索し、受容力を強化することで虐待の予防を図ることを目的とする。

(2)具体的には、面接調査により乳幼児の母親が報告する子どものネガティブな感情表出をする際の対処方法を明らかにし、それを基に「子どものネガティブ表出を受け止める養育力尺度」を作成し、その養育力を高める関連要因を検討し、虐待予防方略を提案する。

3. 研究の方法

(1)面接調査は、乳幼児を持つ母親の就職・無職の両方を対象にするため、関東地区の保育園および子育てサークル・子育て支援センターに協力を依頼した。2014 年 7 月~9 月に計 39 名の母親に半構造化面接を行った。養育者の認知的歪みが虐待につながる(中谷・中谷、2006)ことから、「手に負えない」と思われる育児場面の対応を想起してもらい、その際の認知、情動、行動レベルの親子間インタラクションを語ってもらった。また、インタビュー時に、質問紙調査も行った。質問紙の内容は、育児不安(田中、1997)、精神的健康度(GHQ-28、中川・大坊、1985)および

家庭構成員の属性などである(学会発表 5-8)。

(2)尺度作成のための質問紙調査では、インタビュー調査の結果を踏まえて、親子の間でどのような情緒的交渉が行われたかという視点から予備項目を準備した。2015 年 12 月に関東地区の 1 つの保育園の園児家庭に質問紙を配布し、園児の母親に記入してもらった。回収した 95 名(回収率 80.5%)の中から不備があった 4 名分を除外し、91 名のデータを分析に用いた。調査紙はこの予備項目のほかに、母親の育児不安・精神的健康度(GHQ-28)および子どもの年齢・性別、母親の年齢・学歴・職業および一週間の就労時間、家族形態、父親の年齢などを含むフェースシートで構成されている(論文 1 & 学会発表 4)。

(3)さらに 2016 年度では「子どものネガティブな感情表出を受け止める養育力尺度」の項目構成の精緻化を図った上で、関西・関東の幼稚園・保育園・認定子ども園の園児を持つ母親を対象に、養育力と関連する要因を明らかにするための質問紙調査を複数回に渡って行った。調査紙はこれまでに用いた変数のほかに、虐待行為傾向(中谷・中谷、2006 を参照して作成)、相互独立的 相互協調的自己観尺度の短縮版(高田、2000)、自尊感情尺度(山本・松井・山、1982)、基本的信頼感尺度(谷、1996)、幼児の社会的スキル尺度(中台・金山、2002)の 4 つの下位尺度(自己統制スキル、不注意・多動行動、攻撃行動、引っ込み思案行動)、および CBCL/1.5-5 (Children Behavior Checklist) 保護者記入用日本語版(船曳康子訳・京都国際社会福祉センター 2015 年発行)、被害的認知(會田・大河原、2014)、しつけ観(西澤・屋内、2006)、子どもと遊び上手の程度、夫との信頼関係、夫の育児協力への満足度なども含む(学会発表 1-3 ほか)。

4. 研究成果

(1)面接調査の対象家庭の状況は次の通りである。子どもの平均年齢は 2.5 歳、母親の平均年齢は 35.0 歳、父親の平均年齢は 36.4 歳だった。母親は有職者が 48.7%、専業主婦が 51.3%であった。育児不安の平均値で群分けしたところ、無職の母親の 68.4%が育児不安高群に属し、有意に多かった($\chi^2=6.76$ 、 $p<.01$)。

インタビュー調査の内容分析から、母親が感じる子どもの不機嫌な時の困った行動として、第一次反抗期の過度な自己主張、兄弟けんか・突然のかんしゃく、行動の未熟・遅さなどがあった。その対処方法は、「無理やり親の言うことに従わせる」、「親が自分の感情を制御するためほかのことをし始める」、「子どもの行動を予測して予防策を打つ」、「子どもの気持ちに配慮し、気をそらしたり、時間をかけて諭す・見守る」などだった。無職群と有職群の比較では、子どもの「過度な

自己主張」に対し、無職の母親は「統制」・「妥協」の対処が多く、有職の母親は「見守る」の対処が多かった。また子どもの「行動の未熟・遅さ」に対しては、無職・有職のどちらの母親もいらいらして怒りがちだった。さらに育児不安高群でかつ自身の精神的健康度を低く評価する母親は、子どもに対し色々な場面で「統制不能」と感じている傾向が顕著であった。

総じて言えば、有職の母親は子どもとの距離を保ちやすく、柔軟な対応につながると考えられる。また職形態に関係なく、母親自身が精神的余裕を持つことは楽しく子育てができる重要な要因であり、その背景には良い夫婦関係、姑嫁関係、友人関係が関わっていることがわかった。そのため、妊娠期から子育てネットワークを積極的に作り、子どもが生まれても積極的に夫とコミュニケーションを取ることを心掛けたほうが子育てに役立つ。友人との付き合いにおいては、その場にはいない人について議論しないこと、お礼をその都度述べること、相手がしたいことを察し実現方法を提案することが良い対人関係につながると語られた。また「子どものことで次に何かをしなければならぬ」という拘束から解放され、自分の生活を構造化するスキルも重要であることが研究から分かった。例えば、自分の好きなコンサートに行く、子育て中だから資格を取っておくというような発想や行動である。加えて、子どもと二人っきりの時間でも、母親自身が子どもと一緒に遊びを楽しむことも健康な子育て生活を支える要因の一つであることが明らかになった。

Table1. 対処方法のカテゴリー

力による統制
戦略による統制
妥協・一貫性のなさ
配慮・見守る
予防策を講じる
自己制御
上のきょうだいを統制
対処不能

(2) 「子どものネガティブな感情表出を受け止める養育力尺度」構成の調査では、子どもの平均年齢は3.16歳であり、男児が48.3%、女児が51.7%であった。母親の平均年齢は34.75歳、母親の就労はフル・タイムが57.8%、パート・タイムが37.8%、その他が4.4%。また父親の平均年齢は36.88歳だった。養育力尺度の予備項目を用いて因子分析を行い、最終的に子どもの不機嫌・困り行動に対処する方法として、「怒りによる統制」「感情の混乱」「対処不能・回避」「配慮・説明」の4因子が見出された。

「怒りによる支配」因子の代表的な項目は、「しつけのつもりでもどうしても手が出て（叩いて）しまう」、「子どもが（主張を通そうと）どんなに泣いても、ダメなものはダメと怒る」、「強く叱り、言い過ぎたと反省しても、また繰り返してしまう」などがある。

「感情の混乱」因子の代表的な項目は、「親も子どもと同じように、感情をコントロールできなくなる」、「子どものことで、母親自身のペースがくずれると、いらいらする」、「いつまでも泣いていると、怒りが込み上げてくる」などがある。

「対処不能・回避」因子の代表的な項目は、「子どもが一旦かんしゃくを起こしたら、いくらなだめたり、怒ったりしても効果がない」、「子どもが欲しいものがある店を通らないようにほかの道を選ぶ」、「子どもが怒ると手が付けられない」などである。

「配慮・説明」因子の代表的な項目は、「子どもの不機嫌な様子を察して、声掛けをする（どうしたの、何かあったの）」、「子どもの望ましくない行為を修正するために工夫する（例、偏食をなくすためにワンプレートに盛り付ける）」、「頭ごなしに叱っても子どもに通じないから、目を見て説明する」などがある。

なお、本研究で算出した4つの下位尺度の係数は、0.818、0.800、0.751、0.652で、おおむね満足のいく値に達しており、ある程度下位尺度の内的整合性が有していると言える。また「怒りによる支配」「感情の混乱」「対処不能・回避」の3つの下位尺度のいずれも、母親の育児不安および精神的健康度と有意な関連性を持ち、先行研究が示す方向性と一致しており、構成概念妥当性の一面がみられた。

「配慮・説明」は、子どものネガティブな感情表出に対して、子どもの気持ちを配慮し、適切な工夫をしたり、説明したりして子どもを受容・保護する傾向を表していると考えられる。この下位尺度は、従来という「受容」的な養育態度（例えば、鈴木・松田・永田・植村、1985）に近似している部分があると思われる。一方、子どもの気持ちに寄り添い共感的にふるまうだけではなく、智慧を使って工夫し、伝えようとしている点が先行研究と異なり、特色である。

(3)上記の研究で構成された「子どものネガティブな感情表出を受け止める養育力尺度」を用いて、2度に渡り項目再構成し、いずれも4因子構造が確認され、最終的にそれぞれ7項目から構成される28項目の尺度の下位尺度の係数は全般的に上がった(0.7または0.8以上となった)。本研究で見出された特色がある「配慮・説明」の項目は以下の通りである。

Table2. 「配慮・説明」の項目

子どもの自主性を重んじながら、何がいけないのか話す
子どもが間違い行動をしても、その理由を聞き、どうしたら良かったのかを論ず 子どもを信頼して、子どもが理解するまで話す
子どもが自分で何がいけないのかを判断できるように叱り方を考える 子どもの気持ちを理解するように努める
子どもの長所を褒めながら、問題の行動を自分で直せるように話す 子どもの行動が、なぜいけないのかを根気強く説明する

2016年10月に行った養育力の関連要因を検討する質問紙調査から、「怒りによる統制」「感情の混乱」「対処不能・回避」「配慮・説明」の4つの側面のいずれも、母親の心理状態(育児不安・精神的健康度また虐待行為傾向)、母親の自己・対人関係の捉え方(相互独立的 相互協調的自己観、自尊感情、信頼感)および子どもの発達との関連性を確認できた(Table3 参照)。特にこれまで強調されてきた虐待のリスク要因である育児不安に比べ、養育力と虐待行為傾向との関連が強いことも確認できた。

また Table3 には示されていないが、自己報告する「家庭内で子どもと一緒に楽しく遊べる」力が高ければ、母親自身の心理的状态(育児不安、精神的健康度、虐待行為傾向)が良くなるのに加え、子どもを受け止める力である「配慮・説明」得点が高く、「怒りによる統制」および「感情的混乱」の得点が低くなる傾向があった。従来言われている母親の育児不安を軽減する要因である「夫の育児協力満足度」に比べ、「夫への信頼関係」のほうがもっと関連が強く、「感情的混乱」が低くなること示された。

さらにその後の調査から、CBCL で測定された子どもの情緒的・行動的問題と養育力間で関連が見られ、子どもの内在的・外在的側面まで影響を及ぼしていると考えられる。また子どもの行動に対する被害的認知および体罰を肯定する意識も先行研究で示されたように虐待行為傾向を高める要因であり、それらの要因はさらに養育力と関連していることわかった。

以上の質問紙調査から、子どものネガティブな感情表出場で「配慮・説明」的な関わり方をしている場合、親自身に対しても他者に対しても肯定的捉えている傾向が強く、特に「感情的混乱」「怒りによる統制」になり

がちな場合、親自身の心理的状态にも子どもの発達にも望ましくないと読み取れる。従って、子どもの不機嫌や反抗的な態度に対して、感情的にならず冷静に、子どもの気持ちを配慮し、説明を徹した関わり方が、親子の健全な育児生活にとって重要だと結論付けられる。

Table3. 養育力の関連要因

因子名	母親の育児不安・対人関係等の関連	子どもの発達との関連
怒りによる統制	その傾向が強ければ、育児不安が高い、かつ精神的健康度も悪く、虐待行為傾向得点が高い;自尊感情が低い;相互協調性が高い。	その傾向が強ければ、子どもの問題行動得点が高い。
感情の混乱	その傾向が強ければ、育児不安が高い、かつ精神的健康度も悪く、虐待行為傾向得点が高い;自尊感情および基本的信頼感、对人的信頼感が低い;相互協調性が高くかつ相互独立性が低い。	その傾向が強ければ、子どもの問題行動得点が高い。
対処不能・回避	その傾向が強ければ、育児不安が高く、对人的信頼感が低い。	その傾向が強ければ、子どもの問題行動得点が高い。
配慮・説明	その傾向が強ければ、育児不安が低い、かつ精神的健康度も良く、虐待行為傾向得点も低い。また母親の基本的信頼感、对人的信頼感が高い;相互協調性が低く、相互独立性が高い。	その傾向が強ければ、子どもの自己統制スキルが高く、問題行動得点が高い。

(4)上記に行った一連の系統的な調査研究から、虐待予防のために次のような示唆が得られた。 育児不安よりも養育力は虐待を予測する直接的な要因として示されたことから、従来の育児不安の軽減策に加え、養育力を高めるといった具体的なポジティブな予防の方向性が提供された。 子どものネガティブ感情を包容的に受け止める受容力を強化することで虐待を予防する方法として、養育者の「配慮・説明」の力を高め、「感情的混乱」・「怒りによる統制」を抑制することが可能である。 養育力を支えている背景として、母

親の持つ自己への捉え方・対人関係における信頼感が重要であり、自分を肯定的に受け入れ、子ども・夫などを信頼できるように支援することが有効だと考えられる。ベネッセの「第5回幼児の生活アンケート」(ベネッセ、2015)からわかるように、現在幼稚園・保育園以外で友達と遊ぶことが減り、幼児の8割以上は母親を遊び相手にしている現状にある。本研究の質的・量的調査から示されたように、家庭内における親が子どもと一緒に楽しく遊ぶ力は親子コンフリクトが起きそうな場面での親の子どもを受け止める力、さらに育児不安、虐待行為傾向そのものと関係していることから、その親子の遊びへの支援は虐待予防に重要であるのも新たに分かった。

(5)本研究のように、一般家庭における虐待予防に着目し、子どものネガティブな感情表出について研究したものは国内外でまだ類がみられないため、発達心理学の視点から虐待の本質に迫る重要な研究として位置づけられる。海外では子どものネガティブな感情表出についての研究の多くは、子どものネガティブな感情表出をポジティブに捉え、その感情表出を承認して促すであるかどうかに焦点を当てている。また、子どものネガティブな感情に対する親のコーピング尺度「COPING WITH CHILDREN'S NEGATIVE EMOTION SCALE (CCNES; Fabes, Eisenberg, & Bernzweig, 1990)」があるが、この尺度は設定した12種類の子どものネガティブな感情場面において、親のコーピング行動の選択肢がそれぞれ6個用意されている。その中には、子どもがパーティに呼ばれず、落ち込んでいる時に親が問題解決の方法を提案するといった内容もあり、西洋文化に適しているものである。かつ、本研究で捉える虐待予防の観点ではなく、着眼点は異なる。

子どものネガティブな感情表出の際の親子間のインタラクションに焦点を絞って調べる本研究の成果は、次の諸点で貢献できる。

日本の育児文化に特化した虐待予防の親支援プログラム開発に知見を提供できる。本研究で得られる尺度指標及び虐待発生の知見は、育児中の親や支援側の職員に親子間の力動への理解のヒントを与え、円滑な虐待予防に応用できる。本研究で捉える「子どものネガティブ表出を受け止める養育力」の特質は、アタッチメント理論でいう親が子どもにとって「避難場所としての機能」に通じる部分があるため、子育て臨床・虐待臨床、発達心理学の知見を統合させ、学術的深化につながる。

(6)本研究の成果は発達、保健、福祉の多分野に役立つものであることから、今後の展望としていち早く政策のほうに取り入れることが望ましい。本研究を進めている間、最新の

統計では、2015年度の児童虐待相談件数はじめて10万件を超え、前年度より16.1%増となった(厚生労働省、2016年8月速報値)。それと相まって、「自分は虐待しているのではないか」という虐待不安がますます広がっている。子どもに怒ってしまう自分をいけないと思いつつも、どのようにそれを防げばいいのかわからないというのが、親たちの悩みである。本研究はこのような子育て状況に真正面から答える研究であり、その内容を広く周知し啓発する必要がある。これまでに公開講座などを通じて地域住民や協力園などの数百名の方々に直接また書面で結果報告ができたが、今後はさらに学術論文、一般図書、子育て支援実践等を通じて「子どもを信頼し、配慮・説明という関わり方」の重要性およびノウハウを広く社会一般に伝える必要があると強く感じ、今後の課題にしたい。

本研究で開発された「子どものネガティブな感情表出を受け止める養育力尺度」および虐待予防の知見は、親教室などで「親になること」の啓発に導入され、また赤ちゃん家庭訪問の際にスクリーニング指標として用いることを期待したい。そのために今後はさらに尺度の標準化、父親サンプルへの拡大を行い、親の発達の視点(柏木、1995;2011)から虐待予防の本質を深く追求したいと考える。このように研究と実践の良い循環が出来ることにより、「忸度しすぎのない、信頼し合える社会の創出」につながり、児童虐待の発生予防の一助になれるよう心から願う。

<引用文献>

會田理沙・大河原美以. (2014). 児童虐待の背景にある被害的認知と世代間連鎖—実母からの負情動・身体感覚否定経験が子育て困難に及ぼす影響—. 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 65, 87-96.

ベネッセ教育総合研究所 (2015) 第5回 幼児の生活アンケート速報版[2015年版].2016年2月22日下記サイトより閲覧

<http://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=4770>

Fabes, R. A., Eisenberg, N., & Bernzweig, J. (1990). The coping with children's negative emotions scale. 2016年3月10日下記サイトより閲覧

<http://www.public.asu.edu/~rafabes/cnesall.pdf#search=%27The+coping+with+children%27s+negative+emotions+scale.%27>

花田裕子・坂原美保子・寺岡 征太郎. (2005). 幼稚園に子どもを通園させている母親の育児不安と児童虐待傾向. 長崎 大学医学部保健学科紀要,18(1), 5-8.

柏木恵子.(1995).親の発達心理学. 東京：岩波書店.
柏木恵子. (2011). 父親になる、父親をする. 東京：岩波書店.
厚生労働省. (2016). 平成 27 年度児童相談所での児童虐待相談対応件数(速報値). 平成 28 年 8 月 8 日下記サイトより閲覧
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000132381.html>
中川泰彬・大坊郁夫.(1985). 日本版 GHQ 精神健康度調査票手引. 日本文化科学社.
中台佐喜子・金山元春. (2002). 幼児の社会的スキルと孤独感.カウンセリング研究, 35, 237-245.
中谷奈美子・中谷泰之. (2006). 母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響. 発達心理学研究, 17(2), 148-158.
西澤哲・屋内麻里. (2006). 平成 17 年度厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業) 児童福祉機関における思春期児童等に対する心理的アセスメントの導入に関する研究 分担研究報告書 4 「虐待的行為につながる心理的特徴について：虐待心性尺度 (Parental Abusive Attitude Inventory:PAAI)の開発に向けた予備的研究.
鈴木真雄・松田 惺・永田忠夫・植村勝彦. (1985). 子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家族環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成. 愛知教育大学研究報告,教育科学編,34, 139-152.
谷 冬彦. (1996). 基本的信頼感尺度の作成. 日本心理学会第 60 回大会発表論文集, 31.
田中昭夫. (1997). 幼児を保育する母親の育児不安に関する研究. 乳幼児教育学研究, 6, 57-64.
高田利武. (2000). 相互独立的一相互協調的自己観尺度に就いて. 奈良大学総合 研究所所報, 8, 145- 163
氏家達夫. (1996). 親になるプロセス. 東京：金子書房.
山本真理子・松井 豊・山成由紀子. (1982). 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, 30, 64-68.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

石 曉玲、子どものネガティブな感情表出を受け止める養育力尺度の試作、茶屋 四郎 次郎記念学会誌、査読有、7 巻、2016、73-82.

〔学会発表〕(計 8 件)

石 曉玲、子どもに向き合うために必要な養育力・保育力とは何か～養育者と乳幼児 の関係の本質を問う～、日本保育学

会第 70 回大会、2017 年 5 月 21 日、川崎学園(川崎 医療福祉大学・川崎医科大学・川崎医療短期 大学)・岡山(自主シンポジウム、企画・話 題提供)

石 曉玲、子どもを受け止める養育力とその関連要因の検討、2017 年 5 月 21 日、川崎 学園(川崎医療福祉大学・川崎医科大学・川 崎医療短期大学)・岡山

石 曉玲、子どものネガティブな感情表出を受け止める養育力とは何か 母親側の要因と子どもの発達との関連の予備的検討、日本発達心理学会第 28 回大会、2017 年 3 月 26 日、広島国際会議所・広島

石 曉玲、子どもを受け止める養育力尺度の探索的検討、日本家族心理学会第 33 回大会、2106 年 10 月 15 日、聖徳大学・東京

SHI, Xiaoling How Japanese mothers with dissimilar patterns of cultural self-construal to cope with their children's negative emotions. The 23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, The 23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, August 2, 2016, in Nagoya University & WINC Aichi, Nagoya, Japan

石 曉玲、子どもの第一次反抗期への母親対応と普段の親子のかかわり、2016 年 5 月 8 日、日本保育学会第 69 回大会、学芸大学小金井キャンパス・東京

石 曉玲、子どものネガティブな感情表出に対する母親の対処方法 タイプ別・職形態別の比較、2016 年 4 月 30 日、日本発達心理学会第 27 回大会、北海道大学・北海道

石 曉玲、乳幼児のネガティブな感情表出における母親の対処方法、2015 年 3 月 21 日、日本発達心理学会第 26 回大会、東京大学本郷キャンパス・東京

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.tokyo-fukushi.ac.jp/information/2016/20170202.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

石 曉玲 (SHI, Xiaoling)

東京福祉大学・社会福祉学部・講師

研究者番号：30529483